

再び 専門家を信用するな！

1999年5月9日、TVの放送で「専門家」がいう、日本人の50%は高血圧だ、大多数が血圧異常だという。この時点でチャンネル channel をかえた。……それでいて平均寿命は世界一だという。そんな馬鹿な話があるはずがない。

大多数がその中にはいるなら、それは正常または標準というものではないか。(多少異論があるが、一般論でいう。) 大多数が異常というなら、その「正常」の数字は何を根拠にいうのだろう。

精神異常の話もそうで、どこまでが正常でどこからが異常なのか、明確な線があると誤解している人がいる。そんなもん、あれへんで。(多くの人は自分は標準のほぼ真中にいると思っていて、すこしおかしい人は、自分までが正常の範囲だと思っている。)

上のTVで、見ていた人にあとできくと心臓の悪い人の入浴には適温があり、37~38℃だという。さらには浴槽に椅子をいれて身体がつかる部分をへらすのがいいとまでいう。心臓にかかる負担が軽くなるのだという。ブアッカじゃなかるか。これを提唱する人は、実際に37℃の風呂に入っているのか。試みに37℃の風呂にはいってみればわかる。こんなもん水風呂で、風邪をひきかねない。身体を湯舟・浴槽につけるのが怖いならなにも無理をしてつからなくてもシャワーで充分ではないか。風呂の温度まで決めてもらって、安心なのか！

日本人はいつからこんなに馬鹿になったのか。自分で決定することがなくなって、判断をすべて他人にまかせて不安がないのだろうか。風呂くらい自分の好みがあるだろう。10kmのマラソンをするという、「大丈夫かどうか健康診断」をうける。事前のチェックといえは聞こえはいいが、単に責任転嫁しているだけである。血圧と脈拍を数えて何がわかる。オレがもしその任にあたれば、まず10kmを走ってきてくれ。然るのちに数日間の猶予をおいて許可する、云々。洗濯指数なるものまで考えてもらって、自分で判断せえ！

C型肝炎で通院している。「酒呑んでもよろしいか？」と尋ねるから、呑みたいのか、仕事で必要なのか、あるいは付き合い程度のことか。「呑んで悪くなる」というなら別であるがそうでないなら、「自分できめてくれ」ということにしている。許可がでたと喜んで帰る。

たとえば1999年現在の医療知識で70年前に抗生物質が発見される以前の医療を責めても甲斐がない。それよりも予見できたのに予防しようとしなかった、あるいは被害の

拡大を防ごうとしなかったから HIV 訴訟が起こったし、イタイイタイ病・水俣病・カネミ油症・サリドマイド・森永砒素ミルク事件、アスベスト、公害病、大気汚染による喘息………まだあるけれど、いずれも「今」考えれば浅はかだったことになる。それでも当時の専門家は安全だと言い続けた。つかの間の繁栄に浮かれてと反省するならともかく、少しも学習していない。ただ、米国については、サリドマイド禍はなかった。FDA の女性担当官の功績である。会社はものすごい攻勢をかけて認可させようとしたが、頑として認めなかった。サリドマイドの被害がでたのは、多く西独と日本である。しかも、治療試験（ふつう治験と呼ぶ）の段階で被害がでていて、きちんと報告していれば、あるいは報告の義務を課していたら、あれほどの被害はでなかつただろうし、40年後にソリブジンの被害が生じることはなかったし、HIV 訴訟もなかったはずである。さらに、今ふたたびダイオキシンの被害が取り上げられ、TV や新聞は鬼の首でもとったかのごとくに騒いでいるが、「環境ホルモン」（Hormone とはごく微量で生体の代謝に重要な働きをするものをいう。甲状腺ホルモン、副腎皮質ホルモン、性ホルモンなどがある。）というのは数十年前のカネミ油症の PCB(Poly chloro-biphenyl)のときすでに指摘されている。

レイチェル・カーソン Rachel Carson 女史が *Silent Spring* (沈黙の春) を著したとき、J.F.Kennedy は即座に反応し、DDT,BHC を追放しようとした。農薬製造会社は圧力をかけたが、結局彼女の主張したとおりの経過を辿っている。

カネミ油症以外の、ダイオキシン Dioxin の問題も一概に処理業者だけを責めるわけにはいかない。電化製品やハイテク機器やゴミを廃棄しているのはほかでもない、自分たちではないか。また、市や県など自治体の対応が遅い（現に遅い。専門家会議で遅れてしまう。）というが、それらの業者から税金を徴収し潤ってきたのもやはり自分たちである。

カネミ油症のとき、子孫に及ぼす影響はないか？と訪ねる被害者に「さあ、大丈夫やろ、と思う」（断言しようにも前例がないから、判断の基準がない。）と医師が言ったともいう。30年たっても被害者は体調の不良を訴えるし、「やはり」子供にも影響がでている。昨年の砒素でもそうだし、憎きオウムの子リン事件の後遺症も報道されないだけで、日夜被害者の心と体を蝕んでいる。……・ひどい話があつて、カネミ油症のとき、被害者である子供に面と向かって蔑むような表現で近所の住人が本人に聞こえるように話すこともあったらしい。この子は耐えてきたが、やはり自分の子にはそのつらい思いをさせたくない、という。心ない人はいつでもどこにでもいる。……………

米国で移植をうけて帰国した人は、当然生活保護をうける。収入の道がないからである。なぜかこのことにまで嫉妬するのがいて、「生活保護でも新しい服が買えるのか」と聞こえよがしに言う人もいるらしい。移植しなければ死、したらヤッカミという敵が待っている。

1999.5.28.

なんでも専門家の意見を鵜呑みにするという話から、ずいぶん昔の話を思い出した。ある小児科の大家。幼児を抱えた母親たちの育児相談にのっている。TVで、一問一答形式で答えている。ある母親、「姑は、夏場になると何回も子供を風呂に入れろといいますが、そうしなければいけませんか？」答えて曰く、「私はそれほど入れなくてもいいと思いますよ」ここでバカ親は鬼の首でもとったような顔をした。ここですめばよかったのだ。なるほど、この医者のお考え方はこうなのか、ですんでいる。ところがあるろうことか、この大家あらぬことを口走る。「アメリカなんかではあまり入れてませんしネ」・・・・馬鹿なことを言う。

アメリカと日本では、歴史が違う、文化が違う、風習、風土、気候、伝統すべてが異なっている。ましてや、夏場のジメジメした気候はアメリカにはないものである。湿気のこととも考えずに、なんでもアメリカのすることなら正しいのか！こんな程度の杜撰な頭で大家が聞いてあきれられる。片腹痛いわ。こういうのを舶来崇拜主義者といい、国賊じゃ。だから、専門家を信用するな、とくりかえし言う。

同じころだったか、子供をうつぶせに寝かせる、というのが流行って、何人かの子供が窒息して亡くなった。1人か2人か出た時点で新聞にも載っているし、TVでも言っている。うつぶせにする育児法はアメリカからやってきた。日本とは異なる。たとえばベッドの硬さとか、母親なりベビーシッターなりが、どのくらい配慮できるか、まったく彼我の比較をさえせずになびいて行ったのである。被害者がでたあたりで「うつぶせ育児法」は廃れたものとばかり思っていた。ところが、最近、子供の突然死の原因にうつぶせ育児がはいっていたのにはふたたび驚いた。何にも学習していないのである。即刻やめるべきである。日本古来の育児法のどこがいけないのであるか！